

詩人

林 古 溪

神武天皇即位紀元元年は辛酉であつて、周平王の東遷は、その百十年前で辛未の年である。周武王の即位は四百六十二年前で己卯の年である。その頃、日本の文化はどんなに進んでゐたであらうか、文字も言語もどう想像して宜しいものか。その周の文化が何代かを經て、日本へ來た時は、果してどんなであつたらうか。今より九十年百年前の騒ぎが夢の如くに憶ひ返される。

文といひ詩といふ（漢文漢詩と誤稱してをる）ものは、正しい意味に於いては、奈良朝時代までは、記録されてゐなかつた。勿論、上宮太子の十七憲法、三經義疏等は、實に學問文章の祖となるものではあるが、詩文といふよりは、經書といふべきものである。詩賦文章といつて、藝術に扱はれるものは、日本では懷風藻が始りである。名のみ存して滅び去つた集は幾つもある。下つて凌雲新集、文華秀麗集、經國集此の三集は日本勅撰集の嚆矢である。萬葉集は和歌及び漢詩文の總集として、弘法大師の性靈集は別集として、現存中の最古である。此等の文藝に又日本書紀、古事記、靈異記、東征傳、其の他の文章に、先進文學の、言語的思想的影響の大であつたことは明瞭である。但し、萬葉中に厭世思想、淨土思想の現はれてをらず、（現はれてをるのは文選の模擬）

又法華經關係のものが可なり澤山あるのに、詩文に現れて來ないのは、宗教思想がそこまで行つてゐなかつたのである。

論語・千字文が献上されぬ以前から、佛像經論が献上されぬ以前から、漢文漢詩は日本の文化その思想を誘掖し成長せしめたことは、疑もないことであつた。(儒教といふのは、宋代以後のもの。當時の論語は官吏の心得書、政治に關する手心を示すものとしてであつた)。その漢文漢詩がいつのまにか、日本のものとなつてしまひ、日本の文化、文學の主流、中心となつてしまつた。随分早い時代からである。太子様の時代から現はれ、政治、道德、宗教(信仰儀式)、風俗に沁み込んで、外國物ではなく、日本物となつて發達した。ここに日本人の特色、日本文化の特長がある。先進した文化、言語、思想を取入れ、壓迫を退け、引摺られることなく、特色ある日本文化を作りあげることが出來たのは、實に日本人の尊さである。強靱な創作力を十分發揮したものである。他の文化に蹂躪されず、反て他の文化を驅使したことは、日本人の如き優秀民族でなければ出來ぬことである。一體、一國の文化、一國の文學は、必ず他の國々と相影響するものである。他民族と沒交渉な文化、文學は有り得ぬのである。

我が或る文學について、その時代の思想、風俗(服裝、粧飾)、冠婚喪祭(出土品も)、學問(漢籍佛典)、道德、教育、宗教(神儒佛、其儀式)について、一通りの理解を持ち、その時代の刻本(書籍の傳流等)、藝術(書、寫經、畫、音樂等)、建築、彫刻、工藝品、交通、農業、水利其他の自然に

も相當の廣く深く、理解と觀察とを持つべきで、そこに日本の特色が發揮されると思ふ。

略歴——本名竹次郎。明治八年東京に生る。哲學館卒業。東洋大學講師、松山高等學校講師、廣島高等師範學校講師を経て、現在立正大學教授。



日本出版會承認
イ 250124

國文學叢話

昭和十九年十一月十六日 初版印刷
昭和十九年十一月二十日 初版發行
(共二〇部)

(共二〇部)

著者

定價 ③ 三圓三十錢
特別行爲稅相當額 二十錢
實價合計 三圓五十錢
日本文學報國會

代表者 中村武羅夫

發行者

東京都神田區西神田一ノ五
株式會社 青磁社

右代表者取締役社長

米岡來福

印刷所

東京都神田區三崎町二ノ一
合名新陽堂印刷所

印刷文協東京一〇八五番

發行所

東京都神田區西神田一ノ五
株式會社 青磁社

會員番號 一〇三三三番
電話九段 三六五五番